

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	黒田 彩加
論文題目	現代エジプトにおける宗教と国家 —中道派にみるイスラーム政治思想の現代的展開—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、中東地域研究における重要な研究課題である宗教と国家の関係について、現代エジプトを事例として、イスラーム中道派の主要な思想家の著作と活動を取りあげて考察をおこない、原典研究と臨地研究と合わせて、総合的な研究をおこなったものである。</p> <p>第1章は、イスラーム政治思想の歴史的背景を瞥見した上で、国民国家が形成されて以降の中東諸国においてイスラーム政治思想がどのように展開してきたかを論じている。理論的な問題として、イスラーム復興の進展や世俗化論の後退にともなう政治思想の位置づけを再考し、特に政治思想のスペクトラムの中で「中道主義」をどのように理解すべきかを検討し、本論文における「イスラーム中道派」を具体的に定義づけている。</p> <p>第2章では、19世紀以降の近代的なエジプト国家の成立を検討し、そこにおける宗教と国家の関係を論じている。特に、アラブ、アジア・アフリカ、イスラームという3つの地域的重層性の中にエジプトを位置づけ、国民主義、アラブ民族主義としてのナセル主義、イスラーム復興運動などの展開を描き出す中で、中道派の運動や思想家たちを位置づけている。「アラブの春」の一環をなす2011年の「1月25日革命」によって、エジプトにおける政治と政治思想の布置図は大きく変わったが、本章の最後で、2011年以降に政治潮流がどのように多様化したかについても俯瞰している。</p> <p>第3章では、中道派思想家の重要人物として、国際的な弁護士でもあるサリーム・アウワーを取りあげ、その思想において、イスラーム国家論と宗教共存思想がどのように展開されてきたかを、近現代のエジプトにおけるユダヤ教、キリスト教、イスラームの関係史に即して、丁寧に論究している。特に、アウワーが主唱する宗教共存論の基盤としての「イスラーム文明計画」を詳しく論じている点は評価に値する。</p> <p>第4章では、中道派思想家のもう一人の重要人物として、元裁判官でイスラーム法学にも詳しいターリク・ビシュリーを取りあげ、現代国家とそこにおけるシャリーア (イスラーム法) 施行問題が持つ緊張関係などの検討を中心に、ビシュリーの思想的貢献を論じている。社会が宗教性を強めると時に宗教間の対立や紛争が激化するが、それを防止するために彼が提唱している「基礎潮流」の概念に大きな焦点をあて、ビシュリー思想の社会的貢献についても論究している。</p> <p>第5章では、「1月25日革命」がエジプトにもたらした政治の流動化、政治潮流の多様化を検討し、かつては中道派の社会運動として重きをなしたムスリム同胞団が没落する</p>			

ことによって生じたイスラーム思想の困難な状況を的確に描くと同時に、そのような新しい状況において中道派が果たしている役割と今後のありうべき貢献について検討を加えている。とりわけ、リベラル勢力や世俗主義との関係において、これらの近代的な思潮とイスラーム的な傾向を合わせ持つ中道派が果たしてきた「架け橋」としての役割についても、積極的な評価を加えている。

結論では、以上のような研究の成果を総括して、イスラーム政治思想史の中で、中道派思想家たちが伝統を継承すると同時に革新的な思想展開をおこなっていること、1970年代から「アラブの春」に至るエジプトの政治・社会状況の中で彼らが大きな貢献をなしてきたこと、現代エジプトにおいて政教関係をめぐる相互交渉、接近、対立が展開してくる中で中道派が重要な役割を担っていることなどを結論として述べ、中道的なイスラーム国家論の到達点を明らかにしている。